

轉生天翼種

機凱種

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メリオダスの力を持って転生した彼が大戦に関わり、原作改変をしたその後のお話。
フリーユゲル
天翼種に転生したガブリエルは原作知識を持って、原作に関わっていない。

これは「メリオダスになって異世界を渡る」の第1章のその後の話ですが、原作と変わったのがリクとシュヴィが生き残ったことと機凱種エクスマキナがキツチリ繁殖したことくらいですので、ノゲノラの原作さえ読んでいれば大丈夫です。

諸事情でしばらくの間投稿を停止致します。

目次

第1話	転生天翼種（フリーユージェル）	1
第2話	原作主人公	3

第1話 転生天翼種（フリーユージェル）

ここは空を飛ぶ位階序列第2位幻想種——アヴァント・ヘイム。その背にある位階序列第6位天翼種の空中都市。

そのこのキューブの一つ、そこに天翼種唯一の男性型個体がいた。金色の髪と深い蒼色の瞳に世の女性達を魅了する端正な顔立ちを持っている。

そこはごちやごちやと本が散らかり、魔法の淡い光だけが照らしている。彼はその散らかった本の山に腰掛け本を読んでいた。

彼の名はガブリエル。転生者である。

彼は元々普通の大学生だったが事故で亡くなり、白髭の神様に会い、転生特典を貰い、この世界に転生した。

その転生特典は「ジブリールと同時に造られ、同等の性能を持つ」というものだ。

転生した彼は天翼種に転生した影響か、元々彼の裏側があつたのか。ジブリールや他の天翼種共々、地上に破壊を撒き散らした。

だが、それも昔の話。十の盟約制定から早6000余年。今は他の天翼種同様、本の収集しつつ、原作開始を待っていた。

そして、原作が開始していることを彼に報せる出来事が起きる。

「ガブリエルくん♪見て見て、ジブリールちゃんが面白そうな話を持ってきたよ♪」

ガブリエルの姉達の1人の天翼種がガブリエルの部屋に転移してきた。

「ジブリールが？あいつ確か《書籍共有法》にいじけて出てったんじゃないかって？」

読んでいた本を閉じながら、姉に聞く。

「うん。聞いて驚けジブリールちゃん人類種の所有物になってるんだって！」

ガブリエルはその言葉に驚かず、額を手で押さえた。

「しまった、もうそんな時期か。油断してたわ」

「あれ？驚かないの？」

「わー、驚いたー」

「適当だなく。あ、それでこれがその人類種イマニテイの観察日記だつて」

それを受け取って、中を見ると、ジブリールが空と白に敗れてからの出来事が事細かに書いてあった。

「へえ、面白そうだな」

「だよねだよね！」

「これ見る限り、獣人種ワビーストに挑むみたいだな。後、東部連合にけしかけたいようでもあるな」

「アズリールさまは行く気みたいだよ？」

「ふくん。となるともう少しでここに来るな」

「ん？なんか言った？」

「いいや、なんでも。これから面白くなりそうだなって」

「そうだね、じゃバイバイ」

そう言う姉は何処かへ転移した。

「さて……奴や俺が関わったことでどこまで原作が変わっていることやら」

ガブリエルはこれから起きる出来事への期待に胸を膨らませつつ、姉に貰った空と白の観察日記を読み始めた。

第2話 原作主人公

ガブリエルが原作開始を知ってから半月後。ガブリエルは現在、森精種^{エルフ}の領地にあるとある森精種^{エルフ}からゲームで奪った別荘に居た。

ガブリエルはアヴァント・ヘイムの家以外に4つの別荘を持っている。理由はもちろんジブリール曰く天下の悪法《書籍共有法》から逃れるためだ。アヴァント・ヘイムに置いておかなければ借りパクされないため、前々から準備していたのだ。

ガブリエルがその別荘に居る理由は、海棲種^{セーレーン}の女王とのゲームの記録がある本を前に姉に借りたのを思い出したのだ。

もうすぐ、ジブリールに連れられて空と白、ついでにプラムが海棲種^{セーレーン}の女王とのゲームの記録を求めてやってくる。その為にその本を手元に置いておきたかったのだが――

「くそっ、マジでどこいった」

――無くしてしまったのであった。

天翼種^{フリーユゲル}に忘却機能はない。故に物忘れなどというものもない。なので読んだ後その本をどうしたかキツチリ覚えている。読んだ後本の山にポイッと投げたのを……。

しかも、本の山をまとめて転移させて、別荘や家を行き来しているため、もうどこにあるのかさっぱりわからない。

ガブリエルは転生前から整理整頓が苦手ではあったが、天翼種^{フリーユゲル}に転生してからそれが謙虚になってしまった。故にここ1000年ほどは姉達もガブリエルに本を貸すのを躊躇うようになった。絶対に返ってこないからと……。

「はあく、ま、いいか。」^{くうはく}「のゲームに負けた後、姉さん達やジブリールに手伝って貰おう」

普段なら絶対に拒否られるが、姉さん達はゲームに負ければ十の盟約で強制的に手伝ってもらえるし、ジブリールもマスター達のためなら嫌々でもするだろう、と自分でやる気は殆ど無い彼はアヴァント・ヘイムに転移した。

――

アヴァント・ヘイムに転移したガブリエルは首を傾げる。100人近くの姉達の気配が、一か所に集まっていたからだ。

だが、ジブリールの気配も感じたことで「ああ」と納得し、その場所へ転移した。

ガブリエルがそこへ転移すると100近くの視線がガブリエルへ集中した。

「んにや、ガブくん何かようかにや？」

「何やらみんなが集まってるから何をしているのかなと思ってね。後

——久しぶりだなジブリール」

「おやこれはガブリエル。まだ生きていたのでございますね。非常に残念でございます♪」

ジブリールは嘲笑を浮かべつつ、毒を吐くが、内心ではガブリエルに久しぶりに会えたことを喜んでいた。

それに気づかないガブリエルは、

「おいおい、まだ怒ってんのか？」

と言いながら、やれやれと首をふる。

ジブリールの後ろにいた一つのマフラーを首に巻いている空と白は首を傾げながら問う。

「お、おいジブリール、こいつ誰だ？ていうかジブリールは何に怒ってるんだ？」

「マスター、ご紹介します。彼は天翼種唯一の男性型個体であり、私と同じ『最終番個体』にして、私と同時に造られた双子のような存在にございます。後、怒っておりません」

「おっと、自己紹介が遅れたな。ガブリエルだよろしく」

「そう、俺は空、こっちは白。よろしく。」

「……よろ……」

「ふむふむ、中々面白そうな奴だな。……それでそのマフラーに化ける蚊もどきは自己紹介すら出来ないのか？すると本格的に蚊以下の駄種と言わざるを得ないが……」

目つきを僅かに鋭くし、ガブリエルが言った言葉に、

「やっば、天翼種ってこんななんばつかなのか……」

空は頭を押さえて呻き、

「ひいひいッ！ プラムですう！」

プラムは悲鳴を上げながら、名前を言った。

「蚊の名前なんてどうでもいい。んで、ジブリールが怒っている理由か。アズリール先輩の悪法で出て行こうとしたジブリールが俺を誘ったんだが、それを俺が断ったら急にキレたんだよ」

自分で聞いておいてどうでもいいと切り捨てたガブリエルを空と白は半目を向け、フリュージェル天翼種達は微笑ましいものを見る目を2人に向ける。

その視線に白とプラムは察するが残念ながら女心のわからない男子2名はただ首を傾げる。

「それで、これから何をやるんだ？」

「これから、2人とここにフリュージェルいる天翼種全員でゲームをやる場所にやへえく、面白そうだな、俺もやりたい。ルールを教えてください」

と言ってアズリールへ近づくガブリエルにジブリールはアズリールの近くに転移し、

「アズリール先輩、ガブリエルが参加するならば私がマスターに力をお貸しいたします！」

大慌てでルール変更を要求するジブリールに空と白は眉をひそめて、問う。

「なんで、ジブリールはそんなに慌ててるんだ？」

「……そんな、に……強い、の……？」

2人の言葉にジブリールは我に返り、2人に向き直る。

「は！ し、失礼しました。ガブリエルは先程お話した通り、私と同時に造られた為私と同等の性能を持っております」

その言葉に、2人は顔を引攣らせる。

「さらに、造られてから何度となく、決闘しておりますが、私は一度も彼に勝てたことはありません」

その、言葉に一層顔を引攣らせる2人は、声を震わせながら問う。

「ど、同等の力があるんじゃないのか？」

空の言葉にジブリールは悔しそうに拳を震わせながら、答える。

「小癩なことに毎度、腹立たしい策を弄し、さらに小癩なことに天翼種フリーユージェルでありながら、細かな術式をある程度は使うことができる為、引き分けに持ち込むのが限界でして」

「ふふん♪すげえだろ?」

胸を張るガブリエルを横目に空はさらに問う。

「ちなみに腹立たしい策って?」

「目くらまし、罨、幻影など多種多様な策で私を翻弄するのであります」

「へ、へえ〜」

「とにかく、アズリール先輩。ルール変更を」

「う〜ん、それだと、ジブちゃんとかブくんの一騎打ちにならないか
にや?」

「それはそれで望むところでもあります」

アズリールは腕を組んで悩む。

「んじや、ハンデとしてラスト10分になるまでここで待ってるよ。
それでどうだ?」

ジブリールが空と白、アズリールと話している間に他の姉からルールを聞いたガブリエルが言う。

「それならば、まあ、いいですかね」

「納得したなら始めるかにや?」

アズリールが指をパチンと鳴らすと、音もなく壁が歪み——巨大な穴が空いた。

「では——これよりマスター達お2人と、この場の全天翼種フリーユージェルでゲームを始めます」

穴から身を乗り出した空と白の後ろで、ジブリールが恭しく告げる。

「こちらが、このアヴァント・ヘイムの地図でございます」

バタバタと風ではためく紙を受け取り、ちらりと一瞥して白が頷く。ジブリールは一步下がり、深々と頭を垂れた。

「……マスター、ありがとうございます」

「正直自信ないが、まあ……信じてやるよ。そつちこそ期待を裏切る

「なよ？」

「家族、大事に……する……当、然」

ジブリエールと、空と白。それから原作を知っているガブリエールだけがわかる言葉を交わし――

「――【盟約アツシエンに誓シつて】――ツ!!？」

ジブリエール以外の、全員が手を掲げそう叫ぶと同時。空と白はトントと、壁の穴から中空へと飛び出した。

――

おまけ

ジブリエールがアヴァント・ヘイムを出る時のガブリエールとジブリエールの会話。

「ガブリエール、一緒にアヴァント・ヘイムを出て行きませんか？」

本の山に腰掛け、本を読んでいるガブリエールに唐突に転移してきたジブリエールが開口一番に言う。

「ん？何で？」

本から目を離さずにガブリエールが聞く。

「もちろん、アズリエール先輩が可決した、天下の悪法《書籍共有法》ですよ」

「あく、あれは確かにウザい」

「でしょ？ですから私とここを出て、どっかの図書館を奪ってそこで本の収集を続けましょう」

「やだ」

ガブリエールのまさかの答えにジブリエールは固まる。

「……え？な、なぜでございますか？」

「ん？だって俺姉さん達に借りてる本とかあるし、ぶつちやけ俺別荘あるから関係ないし」

「……つまり、私より姉さん達を選ぶと？」

先程より、冷たい声で問うジブリエールの変化に気づくことなく未だ本から目を離さずにガブリエールが答える。

「え？当たり前じゃん。お前から本借りてないし」

その瞬間空間が震えた。それによりやっと本から目をジブリールに向け、ジブリールがキレていることに気づいた。

「お、おい。どうしたジブリール？」

震え声で問うガブリエルには答えず、

「死ね!!?ガブリエル!!?」

とだけ言っつてジブリールはどこかへ転移した。

「ど、どうしたというのだ」

残されたガブリエルは意味もわからず首を傾げた。